
I S 転生者の軌跡

雪丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者の軌跡

【Zコード】

Z3764BA

【作者名】

雪丸

【あらすじ】

神様の部下のミスで短い人生を終えてしまった少年「神楽 湊」
彼は、神様の提案でISの世界に行くことに・・・。織斑一夏やその仲間たちと一緒に楽しく生活していく。・・・しかしその平穏ながらも楽しい日々を脅かす黒い影が少しずつ彼らに迫っていく。湊たちはその黒い影に立ち向かうことを要されるようになっていく・・・
・湊たちの運命は?そして黒い影の正体とは?

第1話プロローグは突然に

「…………」

気がつくと俺は見知らない空間にいた。周りを見渡すが辺り一面真っ白で何もない……ここはどこなんだらう……

「ここは死者が行き着く最後の場所じゃ」

「誰だ貴方は？……それに死者って俺は死んだのか？」

「儂はオヌシ等の言つ髪と呼ばれる存在じや。それとオヌシの思つてているとおりオヌシは死んでる。」

やつぱり死んでるのかよ。……ああ結構やり残したことばかりなのに。こんな時に後悔ばかりなんて何か嫌だなあ

「…………」

「実はな君に少し用があつての」

「?用?何の」

「スマンかつたツ……」

神様は、いきなり土下座をしてきた。ツではあああああ！？

「えツー？ちよつ頭上げてください」

「セツモいかんのじゃッ！－！儂の部下の天使が『スセス』されしなければ
オヌシは死ぬ！」とせなかつたんじや」

「だとしども貴方が謝る」とじやないでしょ！「－。」

「部下の責任は上回の責任じや」

「この神様部下の責任も自分の責任とかんじていいんだな。・・・」
「まあでわれると許すしかなこじやないか神様の部下の！」とわ。

「・・・いいですよもつ住んだ」とです。」

「スマン。・・・！」のね詫びとしてオヌシを転生せよつと黙つて
いるのじやが・・・ビヘジやへ。」

「本当ですかッ！？」

「つむ。それとオヌシの願いを3つまで叶えてやる！」

「おおッ！－！『前がいいだ』の神様。・・・正直にこまじわれぬ」と
つちがなんか罪悪感感じるんだけど・・・まあいいか。

「んじやその前に行く世界の」と教えてくれない？」

「勿論じや。オヌシが行ける世界は、－の世界、リリカルなのは
の世界それと緋弾のアリアの世界じや。どれがいいかの？」

「んじや、－の世界で」

「結構即答じやのへ。ここのかの?」

「ん。言われた世界の中で一番好きなのがHSの世界だから。」

まあ、本当はほかの世界に比べて死ぬ確率が一応低そうかなって思つたからだけど。一番好きつてのは本心だけどね。

「分かったのじゃ。では願いは?」

「まぢは、あじえすに乗れる?」

「まあそれがないとつまらんからね。」

「それと身体能力が千冬さんよつ少し下」

「最強じやなくていいのかの?」

「ん。あんまり強すぎると田を付けられやすいから。」

政府に狙われるなんてとんでもないし、めんどくさいことありゃしないからな。

「それでも十分田を付けられそうじゃがの」

「いいつての。それと、最後はHSはスパロボの機体で。一次移行はエクスバインがいい

「ふむ。以上かの?」

「おひ。よひしへ頼むよ

ファーストシフト

「じゃ、始めるかの。」

神様が、俺の効いたことのない言葉を呟える。すると俺の体が光に包まれ、この空間一杯に広がると光は俺の中に消えてくよつと無くなつた。

「・・・これで終わり?」

「うむ。後は、E-Sの世界に行くだけじゃが・・・気をつけれ? オヌシを送ると同時におそらくイレギュラーが一緒に入り込むはずじや。オヌシにはそれを駆除してもいいことにもなる」

「了解だ。転生させてもらひうんだ。そんくらいの事へりい遣りせてもらひうだよ」

「やうかの。では送りさせてもらひうかの」

「ん。色々ありがとう神様」

「・・・オヌシ幸あらん」と

神様は俺に能力をくれた時とは違つ、言葉で俺をあいえすの世界へと送り出してくれた。・・・「レから色々と大変かもな・・・でも第一の人生だおもいつきりたのしむさッ

第2話クラスメイトは全員女子！？（前書き）

漸く主人公の名前が出ます。
それと殆ど原作通りです。

第2話クラスメイトは全員女子！？

「全員揃っていますねーそれじゃあ郝R始めますよー」

転生して早一ヶ月。・・・とつとつ俺もこの学園の生徒になつてします。・・・はあこの一ヶ月いろいろあつたな。・・・まあそれは置いておいて、さつきの命令の声は、

「」の一年一組の副担任「山田真耶」先生だ。上から読んでも下から読んでもやまだまや。・・・うん。とても覚えやすい。

「じゃりじゃあ血口紹介をお願いします」

そう言つがクラスメイトたちはシーンとしている。・・・中々薄情だなキミ達。まあ俺もだけ。にしても気まずいな・・・クラスの女子に何か舐め回されるよつて見られていうよつな気がする。

「・・・くふ・・・織斑一夏君ッ」

「はつはつー？」

「あつあのついきなり大きな声出しておつ怒つてるかな？「ゴメンね、でも自己紹介」「あ」から始まつて今「お」だから織斑来んなんだよね。だからね、「」、「」めんね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

・・・山田先生アンタ誤りすぎだらつ。教師だからもっと堂々としていいと思うけど・・・それにしても一夏何か変なこと考えてんじゃないのか？

「い、いやそんなに謝られても・・・ってか自己紹介しますから先生落ち着いてください。」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ？」

「本当ですよ。・・・ええーと織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

戸惑い気味に言う一夏。・・・しかし、クラスの女子はもうちょっとしゃべってよと言わんばかりに見ている。・・・あれはきついだろつな・・・あつ一夏が唯一知り合いの篠ノ乃箒にアイコンタクトを送る。・・・しかし失敗

意を決したのか一夏は

「・・・以上ですっ」

「ブツ・・・アハハハツ」

ガタタタツ

何人かの女子が椅子から口ケる。・・・しかし原作読んでこここのシーンは面白いなあ。だから飽きないんだよひと夏には。『パン』

「いってえー・・・げえ関羽ツ！？」

『パン』

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

おおう、すごい威力だ。あんなので叩かれたら凄まじい勢いで脳が
衰えるんじゃないかな?

「あ、織斑先生。会議の方はもう終わられたんですか?」

「ああ。山田君クラスへの挨拶を押し付けてしまってすまなかつた
な」

一夏の時との対応が違うのは・・・口頭の行いだろう

「おい。お前も自己紹介しろ」

「へーい。」

『パン』

「・・・神楽湊です。そこにいる織斑一夏と同じで男子でEVAを使
える奴です。・・・まあ趣味は読書と料理。特技は機械いじりです
よろしくお願ひします。」

ああー痛かった。本当シャレに並ん痛さだ。・・・まあ自己紹介は
あんなもんでいいだろ。現に織斑先生から出席簿アタックが飛んで
こないし。

「・・・お前もあのくらこできるよひになれ」

「分かつたよ千冬ねえ『パン』 いてえ!?」

「織斑先生だ馬鹿者」

「ほん。・・・諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言葉をよく聞き、よく理解しろ。できることは出来るまで指導してやる。私の仕事は、弱冠15歳を16歳に鍛え上げることだ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな？」

それつて結局逆らえないんじゃね？・・・なんつー絶対王政？

「・・・・・あやああああああああああああ」

「きやーーー本物の千冬様よー?ずつとファンでした。」
ぬおうツ！？コレは・・・実際に聞くと耳に来る・・・ijiの女子は超音波でも放つているのか？

「私、お姉さまに憧れて北九州からやつて來たんですッ！」

「ああ・・・なんて凜々しいお顔。・・・しばらくオカズに困らな
いわ」

「ごい人気だなあ・・・まあ最後の人の発言は気にしないことにす
る・・・なんのオカズにするのかは・・・まあわかるだろ？
俺も物凄い歓声に足気味になつていると織斑先生が額に手を当てな
がら

「よくもまあ毎年これだけのバカ者共が集まるものだ。・・・それ
とも何か？私のクラスだけに集中させられているのか？」

「 もちあああおお姉さま。もつとぞつて、もつと黙つてッ … 」

「 でも時こは優しくして」

「 もして、つけあがらないよう躊躇してえ」

・・・ダメだ」こつら早く何とかしないと。・・・あつ織斑先生本氣で呆れている。あしじょうがないかこんなのはばかりだし。

「 ・・・はあ。ほりSHRはもう終了だ。コレからESの基礎知識を半月で覚えてもらいつ。その後実習だが基本動作を身に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろよくなくとも返事をしろ。私の言葉には返事をしろいいな?」

おお本当に凄い鬼教官つぱりだ。・・・まあ織斑先生も呟いていたし、授業が始まる前に一夏に接触しておくか。・・・からかいがてらり・・・な

第3話宣戦布告（前書き）

意外とまだヒロイン登場まで遠い（――・・・）

第3話宣戦布告

「 なあ神楽湊、 でいいよな？」

「 ひから声をかけひしてこいたらあひの方から声を掛けた。
まあ好都合だけじね。」

「 おひ。 サウトキミは織斑でいいんだよな？」

「 一夏でいいよ。 男子なんて俺とお前だけだし仲良くなつよ。」

「 じゃ、 俺も湊でいいよ。 よろしくな一夏。」

俺と一夏は、 握手を交わした。 ··· 意外と親しみやすいな一夏の
やつ、 だからモテるのか？ ··· うーむコレは是非ともコソを聞き
たいが「 イツは無血覚だろうな。」

「 ちょっとこいか？ 」

「 ん？ 篠？ 」

「 神楽··· だつたか？ イツを少し借りてもいいだろ？ 」

「 おお。 構わんよ篠ノ乃さん」

「 せうか。 スマンナ。 」

「 わりい湊。 また後で話そうな？」

「ほいほい。いいから行つてこい」

そう言つて俺は幕と一夏が教室から出でてのを見送る。・・・そして、この好機の視線をじつじつかな・・・まあ後で一夏に憂い晴らしにするといふ

「ねね、みつくん。」

「?みつくん?」

「うふ。湊くんだからみつくん。」

「まあこいや。・・・でどうしたの・・・えつと」

「あつ、じめんなー私は布仮本音。のほほんでこいよ。」

本音ことのほほんさんが話しかけてきた。原作通りダボダボした制服だな。まあ不思議と似合つてゐるけど

「んどのほほんさんなじみのよな要件かな?」

「んー取り敢えず挨拶しておひつと黙つてー」

「ありへ・やうなの?」

意外だ。意外に礼儀正しい。・・・これは原作でののほほんさんに対する評価を見直す必要があるかもしない

「うんそだよー。あ、もうすぐ時間だから戻るねー」

「じゃあまた後で？」

そう言つた直後授業開始を知らせるチャイムが鳴つた。言わすもがな一夏たちは織斑先生の制裁を受けることが確定した。

「……………」であるからしてIISの基本的な運用は現時点で國家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIIS を運用した場合は、刑法によって罰せられ

「ふうむ。勉強になるなコレは。・・・えつ？神様から知識は貰わなかつたのかつて？・・・だつてそれじゃあ授業が退屈だらう？それに知識を自分で育むのも悪くないし。

「というわけです。・・・織斑君？」

「えつ！？・・・はい」

「何か今までで分からないとこにはありますか？」

「えつとあの・・・」

「何ですか？遠慮せずに行つてくださいね！－私は先生ですから－」

・・・うん。山田先生。そのやる気は尊敬しますが・・・

「はい先生つ

「何ですか織斑君」

一 殆どわがりません

え・・・死とですか(?)

ほら、流石に山田先生も表情が引きつっている。全く一夏つて奴は・
・まあ面白いからいいけど。

「他にここまででわからない人はいますか？」

入学前に渡した参考書は読んだか?」

参考書?・・・ああ、古し電話帳と隣違えて捨てました。

パアン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3764ba/>

IS 転生者の軌跡

2012年1月10日20時57分発行